

# 日本における天才・英才・才能児・優秀児・ギフテッドの心理学史

人間科学部 人間科学科 2 年

坊田 祐貴

## はじめに

第二次世界大戦後、日本国憲法第26条第1項に「その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利」が定められた。しかし、戦後の日本の教育は「平等至上主義」と批判されてきた（岩永，1997）。このような状況で画一的でない教育が目指される中で、近年、高IQや優れた才能をもつギフテッドが注目を集め始めている。ギフテッドはその能力ゆえに社会に適合できなかつたり、能力を隠そうとして、潜在能力を測る知能テストなどの成績が良いのに、ふだんの教科学習課題の成績が悪いアンダーアチーバーになってしまったりすることもある（松村，2003）。そして、ギフテッドと呼ばれる児童は、天才、英才、才能児、優秀児と呼ばれてきた児童と重なる部分がある。しかし、心理学がこれらの児童をいかに研究してきたかについて包括的に述べた文献は見当たらない。そこで、本論文では、天才、英才、才能児、優秀児に関していかなる心理学的研究がなされてきたか、その概要を述べる。

## I 早教育の必要性

Cinii Articles < <https://cinii.ac.jp/> > で「天才」というキーワードで検索すると、心理学に関する論文で最も古いものは、『心理研究』に掲載された、木村久一の「天才教育論」（1913）である。これは、Boris Sidis の『Philistine and Genius』（1911）の各章の大意を、木村が日本語訳して紹介したものである。木村は、『Philistine and Genius』を『俗物と天才』と名づけ、「讀んで見るに極めて面白い」と評価している。「天才教育論」では、第一章の大意と

して、「個人の性格如何は幼時の教育如何に由る。従つて國民の性情如何は子弟の教育如何に由る」、「子供の時に一生の形が出来る」、「教育の如何に由つてどんな形にでも成る」ことが挙げられている。そして、第九章の大意として、「教育に於いて大切な事」として、「實に子供が此の潜勢能力即ち天才を自由に使ひ得る様に引き出して遣ること」が挙げられている。「潜勢能力」とは、人間の奥深くに潜んでいる非常な能力のことである。また、第十一章の大意として、「多くの子供は二歳から三歳までの間に教育を始むべきである」ことが挙げられている。

その後、木村は、『心理研究』に掲載された「英才教育の話」（1916a）で、幼児期から教育を受けた「ノルバート・ウィーナー」、「ウィリアム・ジェームズ・シデイス」、「アドルフ・バール」の経歴を紹介した後で、「彼等は或る種の教育の結果、必然に生じた英才であり、「その證據に、ウィーナー君とバール君は、共に兄弟姉妹を有つて居るが、皆な同様な教育を受けた爲に、何れも同じやうな學歴を辿つて居る」旨述べている。

そして、「過去の例」として、「カール・ヴィット」の例を挙げ、「予は彼等の未來は極めて有望だと思ふ」と評価している。木村によると、「ヴィットは、頗る思はしくない赤兒であつた」。しかし、ヴィットは父 Karl Heinrich Gottfried Witte の教育を受けた後、様々な功績を残し、「ダンテ研究の泰斗と仰がるゝに至つた」。木村によると、ヴィットが受けた教育は『カール・ヴィットの教育』に記されている。『カール・ヴィットの教育』とは、木村が、Karl Heinrich Gottfried Witte の『The education of Karl Witte』を日本語表記したものだと考えられる。木村は『カール・ヴィットの教育』が「ハーヴァード大學の圖書館に一冊ある」ことを指摘するととも

に、「ウィーナー君の父ウィーナー博士はハーヴァード大学の教授であり、「彼は『カール・ヴィッテの教育』を読んでウィーナー君等を教育した」こと、「シディス君の父シディス博士はどうかと云ふと、彼も同大学の卒業生であつて、矢張同書を読んでシディス君を教育した」こと、「パール君の父パール博士」の『「家庭に於ける學校」』と云ふ本を読んで見ると、彼も矢張『カール・ヴィッテの教育』を読んで、パール君等を教育したことは疑ひない」ことを指摘している。そして、「ヴィッテ」や「ウィーナー君やシディス君やパール君等」が受けた教育を「早教育」と表現し、「ヴィッテの父の言葉を借りて云へば、子供の知力の活動し初めるその時から始めた教育」と定義している。その後、木村は、「希臘の歴史」を振り返り、「アテネは天才星の如しと云ふ有様である。ところがこのアテネの人口は、實に驚くべく僅かであつた」と述べた上で次のように述べている。

かの人種改良學の創始者なるゴールトンは、アテネ人は優秀なる人種であつたからだと云ふ。それもあらう。併し更に大なる原因は、彼等が早教育を受けたことである。早教育はアテネ人の習慣であつた。現代人も、早教育を施せば非凡な人間になる。

そして、木村は、「教育の理想」として「小供の能力の可能性を十割實現させること」を挙げた上で、「小供の能力の可能性には、遞減の法則と云ふ法則がある」ことを指摘している。木村によると、「遞減の法則」とは、「教育を始めることが晚ければ晚いほど、小供の能力の可能性の實現する割合が少なくなる」法則のことである。木村は、「遞減の法則」の生ずる理由について次のように述べている。

吾々動物の能力は、それぞれその發達期を有つて居る。而してこの發達期の期間は、それぞれ一定して居る。勿論或る能力の發達期の期間は可成長い。併し或る能力の發達期の期間は極めて短かい。而してこの發達期の期間内に發達させなければ、その能力は永久に發達しなくなる。

「天才教育論」及び「英才教育の話」を見る限り、ヴィッテの父は主としてヴィッテの知的能力を伸ばそうとしたとも考えられる。しかし、木村は、『心理研究』に掲載された「英才教育の話（二）」(1916b)では、「主知的教育は、決してヴィッテの父の目的でなかつた」ことを指摘している。

また、木村は、『心理研究』に掲載された「英才教育の話（三）」(1916c)で、「トムソン兄弟やミルの受けた教育法」、「ゲーテの教育」及び早熟の天才の経歴について述べた上で、『心理研究』に掲載された、「英才教育の話（四）」(1917a)で「人種改良學者の云ふやうに、能力の遺傳は當然である」が、「親から子に遺傳する能力は可能的能力(Potential ability)であつて、そのまゝでは効力がな」く、「それが發揮されて初めて効力を生ずる」と主張する。木村は、この「可能的能力」を「天賦或は稟賦」と呼んでいる。

また、天才について、木村は次のように述べている。

ビュフォンは天才は忍耐だと云ひ、ゲーテは勤勉だと云ひ、ショーペンハウアーは没我だと云つたが、予はこれに附け加へて、天才は熱中だと云ひたい。又た天才は興味だと云ひたい。

そして、木村は、「小供が興味と熱中の性質を獲得する」ためにも、早教育が必要だと主張する。そして、「ヘンデル」、「バッハ」、「ガリレオ」、「タッソ」、「ニュートン」の例を挙げ、興味と熱中の重要性を述べている。「英才教育の話」を全体として見る限り、木村は、様々な事例を根拠として、知的能力に限らず、子どもの潜在能力を發揮させる手段として早教育を評価していたと考えられる。

その後、木村は、心理学会出版部から、『早教育と天才』(1917b)を出版した。これに対し、香川生は、『心理研究』に掲載された、「時評一束」で、早教育について、「たゞ子供を可愛ゆい自動人形としておもちゃにしておく日本人の遣り口を極力排撃したのは甚だしい事である」とした上で、同書に対し、「金があつて而かも餘り頭のよくないハイカラ母様連に誤解されたり又はやきもきさせることも勘

くなかった」と評価していた。これに対し、木村は、『心理研究』に掲載された、「早教育に対する非難に答ふ」（1918）で、「予の見るところにして誤らずんば、香川君の意は、早教育其物を非難するに存せずして、早教育の主張者に對する親切なる注意と種々なる注文である」として、香川の主張に反駁する「理由を多く認めない」とした。そして、「拙著『早教育と天才』が、我國の社會に引き起した意外に大なる反響は、實は予自身にも案外である」、「今日に於いては、早教育と云ふ言葉は既に我國の通用語となり、少なくともこの言葉だけに、我國の津々浦々まで普及したと云ふも過言ならざる有様となつた」として早教育という用語が普及したことを指摘している。早教育に対する非難を、大きく「一、早教育其物に對する非難」、「二、予の説き方に對する非難」、「三、早教育を誤り施すより生ずる弊害に對する非難」の三種に分け、次のように述べている。

第一の早教育其の物に對する非難は、予の最も注意して聞かんと欲するところのものであるが、幸か不幸かこの種の非難は今日までのところ甚だ少なかつた。あつても議論として甚だ薄弱なるものであつた。

以上で見てきたことからすると、木村は、天才とされる人物が受けてきた教育を調べた上で、子どものもつ能力を発揮させるために早教育を主張したと考えられ、早教育そのものは心理学の分野で受け入れられていたと考えられる。しかし、「英才教育の話（四）」は「人種改良は、教育と共に人生の二大福音である」という一文で終わる。したがって、木村が早教育を主張した背景には優生思想もあったと考えられる。

## Ⅱ 優生思想の強化・早教育の意義の捉え方の変化

そして、優生思想の影響は次第に強まったと考えられる。「天才教育論」、「英才教育の話」、「英才教育の話（二）」、「英才教育の話（三）」、「英才教育の

話（四）」は『心理研究』に掲載されていた。『心理研究』は、ジョーンズホプキンス大学でホールに師事し、帝国大学教授となった元良勇次郎が顧問を務めた準学術誌であった。元良は心理学会を組織した人物でもある。（サトウ、2016）。もっとも、齋藤茂三郎は、『心理研究』に掲載された「社會改良と優生學」（1919a）で「優生運動の歸趨を最も簡明に説明してゐる」「カリフォルニア大學教授ホームズ博士の所論」を紹介していた。したがって、『心理研究』も次第に優生思想が強まっていったものと考えられる。齋藤は、同じ年に『心理研究』に掲載された「軍事に應用された米國の心理學」（1919b）で、「米國の心理學者及び心理學が軍事上に貢獻したことは莫大なものである」と評価した上で、「如何なる組織の下に米國の心理學者が活動したか」を紹介している。このことからすると、『心理研究』で優生思想が強まっていったことには軍事的背景があると考えられる。そして、齋藤の「天才の輩出について」（1932）は『民族衛生』に掲載された。『民族衛生』は1930年に創設された日本民族衛生学会の機関紙である。『民族衛生』に掲載された最初の論文である、永井潜の「民族衛生の使命」（1931）は次の記述で始まる。

確に人が、あらゆる人間生活の源泉でなければならない。一家の興亡も、一國の盛衰も、世界の平和も、皆夫れを構成せる人の如何によつて決定せられることを、何人も否定することは出来ない。政治も、經濟も、法律も、宗教も、教育も、文學も、藝術も、凡て人を中心とせることは、明々白々である。その意味に於て、人生を向上せしめ、幸福ならしめ、安寧ならしめん爲の根本策は、何よりも先づ、人間そのものを改善しなければならない。民族衛生學の使命は、民族としての人間本質の改善に外ならないのである。

「民族としての人間本質の改善」を「民族衛生學の使命」と捉える論文を、最初の論文として掲載した『民族衛生』において、齋藤は、「天才の輩出について」で、海外の研究について概観した上で、「天才の輩出について考へなければならぬ外的條件は大體

次の四點に纏めることが出来ると思ふ」として、「精神の刺戟となる所の社會的環境」、「徹底的訓練を要すること」、「生活難のないこと」、「社會的崇敬」の四點を挙げている。木村によると、「徹底的訓練を要する」のは、「特種能力が完全なる自己表現を得る爲めには、學校乃至實地に於て十分の訓練陶冶を経なければならぬ」ないからである。そして、「社會的崇敬」とは、「天才にしても、若し侮蔑視さるゝ民族の中に生れたならば、決してその天才を十分發揮し得ない」という意味である。

「英才教育の話」によると、木村は、遺伝的に恵まれていなくても、「早教育を施せば非凡な人間になる」、と考えていた。一方、「天才の輩出について」によると、齋藤は、遺伝的に恵まれていても、「若し侮蔑視さるゝ民族の中に生れたならば、決してその天才を十分發揮し得ない」と考えていた。この民族を重視した表現は、「英才教育の話（四）」の最後の一文で、木村が、「人種改良」と「教育」を並列的に挙げているとは異なる。また、木村と齋藤では、早教育がなぜ必要なのか、という点についての考えも異なる。木村は、「英才教育の話」で、「通減の法則」が存在するため早教育が必要であると主張し、「英才教育の話（四）」で、「小供が興味と熱中の性質を獲得する」ためにも早教育が必要であると主張していた。一方、齋藤は、「天才の輩出について」で、「學校乃至實地に於て十分の訓練陶冶を経なければならぬ」ため早教育が必要であると主張していた。すなわち、練習量を確保するために早教育が必要である、ということである。このような違いは、木村の「英才教育の話」が、「教育の理想」として「小供の能力の可能性を十割實現させること」を挙げている論文であったのに対し、齋藤の「天才の輩出について」が、文字通り、「天才」を意図的に「輩出」することを念頭に執筆された論文であったことによると考えられる。

### Ⅲ 天才・英才・才能児自体への注目と施すべき教育についての検討

第二次世界大戦が終わり、軍事的背景の影響が弱

まると、天才・英才・才能児自体が注目されるようになった。東京都立大学名誉教授で教育心理学を専門とした森重敏は、東京文理科大学内児童研究会による『特殊児童の心理（児童心理叢書、5）』（1948）に掲載された「優秀児」以後、知的優秀児について追跡調査を行った。大伴茂は、森と同時期に天才児について研究して『日本天才児の研究』（1948）を執筆し、その後も天才児について研究を続けた。森と大伴が優秀児や天才児と表現するのは高知能児、具体的には主に高IQ児であった。（松村・鈴木・寺田・森・南、2005）。IQとは知能指数のことであり、精神年齢/生活年齢×100によって算出され、100が当該年齢の平均となる（藤村、2014）。大伴は、関西学院大学教授で教育心理学を専門としていた（関西学院大学心理科学研究室、2019）。

もっとも、IQ偏重の流れに対して疑問を呈するような研究も出てきていた。『児童心理』に掲載された、執筆当時大阪府立生野ろう学校長であった北野藤治郎の「特異才能児のその後——特集・特殊児童の心理——」（1958）や、『教育と医学』に掲載された、執筆当時九州大学教育学部助教授であった成瀬悟策の「英才児・特殊才能児の学校適応——特集・学校ざらい——」（1963）では、IQは53だが、昆虫を描かせたら天才的画才を発揮する山村昭一郎が取り上げられた。また、成瀬は同じ論文で、IQは高いが学校に適応できていない子どもを取り上げた。特定の子どもを取り上げる個性記述的な研究手法は、木村が用いていたものに近いと考えられる。そして、同時期に松本金寿が責任編集を務めた『特殊児童双書』（1966）では、宇都宮大学の岩田茂樹と宮城教育大学の野呂正により「英才児」が執筆された。「英才児」が「特殊児童」の中に含まれたということである。東北大学附属図書館（2020）によると、「当時、このようなテーマの双書は日本では初めてともいえるべきものであった」。松本は、当時、東北大学教育学部の教授であった。東北大学は、昭和24（1949）年の創立以来、特殊教育学に関心を持ってきた。松本は、東北大学教育学部に発達心理学研究の基礎を確立した人物と評価されている（東北大学附属図書館、2020）。

また、天才・英才・才能児に対し、あるいは優秀



児を育てるために、いかなる教育を施すべきかについても議論されるようになってきた。例えば、大伴は『天才——優秀児は生むことができる——(現代っ子の心理 / 第1巻)』(1963)を執筆した。一方、天才教育や英才教育の問題点が指摘されるようになった。『教育技術』に掲載された、松本の「天才教育の基本的諸問題」(1953)、執筆当時九州大学教育学部教授であった関計夫の「才能教育の心理学——特集・創造性とカウンセリング——」(1965)はその例である。前者では、「学問の切売りや学問体系の機械的組合せにほかならぬ新教育の単位制度は、天才教育へのマイナスとしか認めざるを得ないのである」、「高度に分化した今後の科学界においては、協同研究こそが学の進歩をもたらす唯一の方途とされているのであるから、従来のような意味における科学的天才への座席は残されがたいと思われる」と天才教育の問題点が指摘されている。後者では、天才を発見する方法の問題、芸術的才能の評価方法の問題、社会教育の必要性の問題、天賦の才能によって世の中に奉仕するという考えに立つべきこと、義務教育の期間が固定されている問題、教師の能力の問題、英才教育といっても、早くから専門教育を行うのではなく、一般教養の地盤の上に立つべきこと、本人の個性に応じた、特徴のある構造的全体の教育をすること、が指摘されている(関, 1965)。特に、野呂は、能力、才能の定義が明確でない点を問題視した。野呂自身も「英才児」を執筆した当初は能力や才能といった言葉を明確に区別せずに用いていたとしているが、論者が多くなり、言葉の混乱が生じてきたと感じた野呂は、レオンチェフ(Leont'ev, A. N.)の能力の分け方を援用した。レオンチェフは、能力を、個体発生の中で環境変化に対応して条件づけられる能力であり、その動物一代限りで遺伝されない「自然的能力」と、歴史的、社会的に条件づけられた、人間だけに特有の能力である「特殊—人間的能力」との2つに分けた。野呂は、前者を能力、後者を能力と呼んで概念を規定した(野呂, 1971a)。野呂は、同論文で、当時の日本の才能研究の状況を次のように評価している。

英才教育に対して理論的基礎を与えてくれるはず

の才能研究が、日本において貧困であることは事実であり、残念なことである。だから、英才教育がいったん国家的要請によってクローズアップされてくると、いきおいそのモデルを欧米とくにアメリカの既製品に求めるということになる。それは、一方ではターマン一派の「知能テスト的英才児」教育であり、他方ではギルフォード、ゲッツェルス、ジャクソンあるいはトーランス一派の「創造性テスト的英才児」教育である。

この「国家的要請」の内容については、『児童心理』に掲載された、野呂の「優秀児の思考力——その特色と指導の要点について(思考力を育てる(特集))——」(1971b)の、国民教育研究所の『子どもと教育実践 教育改革と国民教育1』(1971)に対する次の記述を見る限り、国民の能力を経済発展の手段とする、経済的な要請を指していると考えられる。

「観察力」、「思考力」、「表現力」、といっても、それらは、抽象的な「生活実感」をかけはなれた単なる操作能力となっているわけである。しかも、「それが内容を抜きにした形式的な機械的操作の能力であればあるほど、つまりその限りで『合理的』であればあるほど」それは、資本が追求する「経済的合理性」にとって有効になるのだ、と報告書は指摘する。能力の手段化は許さるべきではない。

「才能教育」という用語は、一般的には音楽の早教育を指すほどのものであったが(早川, 1956)、この時期には、心理学の分野でも用いられるようになってきた。もっとも、1970年代以降、心理学的研究では、才能教育が研究対象となることは少なくなった(松村・鈴木・寺田・森・南, 2005)。

#### Ⅳ アメリカの影響・海外の才能教育の実態

1990年代になると、関西大学教授で発達心理学と教育心理学を専門とする松村暢隆は、アメリカに注目した。松村は、『関西大学教職課程センター年報』

に掲載された、「英才教育から全校拡充学習へ——アメリカのSEMの学校教育改革への示唆——」(1994)を執筆した後、『関西大学文学論集』に掲載された、「スタンバークによる知能の三部理論」(1999)で、従来の、IQを重視する知能理論とは異なる、新たな知能理論に注目した。この論文はStrenberg, R. J.が『Beyond IQ: triarchic theory of human intelligence』(1985)で発表した理論に注目したものである。この論文の前には、同理論が「鼎立理論」として紹介されていた(子安, 1989, 1992)。しかし、松村は、スタンバークは、従来の知能理論を分析して、各理論を、知能と、個人の内界との関係、外界(社会)との関係、内界と外界の両者(経験)との関係の3つを扱ったものに分類したが、この3つは同レベルで並立するものではないこと、Strenberg, R. J.が『Successful intelligence: how practical and creative intelligence determine success in life』(1996)でtriarchicをthree-partと言い換えていることから、三部理論と訳出している(松村, 1999)。もっとも、『誠信心理学辞典』(2014)では、triarchic theory of intelligenceを鼎立理論として解説している(藤村, 2014)。その後も、松村は、アメリカに注目し、スタンバークの『Thinking styles』(1997)を『思考スタイル——能力を生かすもの——』(2000)へ、Renzulli, J. S.の『Building a bridge between gifted education and total school improvement』(1995)とGentry, M., Reis, S. M., Renzulli, J. S., Moran, C., & Warren, L.の『Enrichment clusters: Using high-end learning to develop talents in all students』(1995)を『個性と才能をみつける総合学習モデル』(2001)へ、Gardner, H.の『Intelligence Reframed: Multiple intelligences for the 21st century』(1999)を『MI: 個性を生かす多重知能の理論』へと翻訳した。Renzulli, J. S.は、執筆当時コネティカット大学の教育心理学教授であり、その後、才能教育教授を務めている(Human Intelligence, 2018a)。そして、Gardner, H.は、執筆当時ハーヴァード大学教育学大学院の教育学教授であり、その後、認知・教育学教授を務めている(Human Intelligence, 2018b)。ガードナーの多重知能(multiple intelligences)の

理論も、スタンバークによる知能の三部理論同様、従来の精神測定学の知能指数の概念を超えて知能の多様性をとらえようとした。Gardner, H. (1999)によると、知能とは、「情報を処理する生物心理学的な潜在能力であって、ある文化で価値のある問題を解決したり成果を創造したりするような文化的な場面で活性化されることができるもの」である。独立した知能としては、言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能、身体運動的知能、空間的知能、対人的知能、内省的知能、博物的知能の8つが認められている(松村, 2003)。そして、『個性と才能をみつける総合学習モデル』の「解説」では、レンズーリとリースの開発した全校拡充モデル(SEM)について、1985年にSEMについての単行本が刊行されたことを指摘した後、次のように解説している。

SEMが理念とし、また実現してきたのは、まず、特別プログラムの対象を約一五%の子ども(従来のプログラムでは三~五%)に広げ、多様な拡充を提供すること、才能教育プログラムと普通教育のカリキュラムを提携させること、対象児を「才能児」と名づけ隔離しないこと、拡充をふだんの学級にも適用してすべての子どもの拡充を行うこと、である。

日本では、「教育上の例外措置」(いわゆる飛び入学)こそが、特別プログラムとしての戦後の公教育における才能教育の公式な始まりであったが、『個性と才能をみつける総合学習モデル』刊行時点で飛び入学を導入していたのは、1998年度から導入した千葉大学と、2001年度から導入した名城大学の2校のみであり、導入は毎年数名規模にとどまっていた(松村, 2003)。日本の政策とSEMの間には隔たりがあり、SEMが注目されることも考えられたが、『個性と才能をみつける総合学習モデル』の「訳者あとがき」では、日本の当時のレンズーリの知名度についての状況が次のように述べられている。

本書刊行前に、日本でレンズーリの名前を知っていた人は(教育学者でさえも)あまりいなかったでしょう(アメリカでは、学校の教師で知らない人はまれだろう)。ここ数年間で訳者が何度か少しずつ

紹介する機会があった他に、まとまった紹介は、麻生誠・岩永雅也編『創造的才能教育』（玉川大学出版部）のみです。

また、『特殊教育学研究』に掲載された、「準備委員会企画シンポジウム6 才能教育と特別支援教育（日本特殊教育学会第42回大会シンポジウム報告）」（2005）の「2. 話題提供者の発表要旨」で、森の、優秀児の領域の心理学的研究の状況に対する評価が次のように述べられている。

最初の拙論（1948）で、この領域の心理学的研究の立ち遅れとその科学的基礎研究の必要を強調したが、50数年後の動向には新たな言及がほとんど要らないほどの現状で、とくに教育心理学的研究は、欧米に比べて依然としてきわめて低段階にあるように思える。

この森の評価からすれば、レンズーリの知名度が低い、というだけではなく、そもそも、日本特殊教育学会第42回大会シンポジウムの時点で、優秀児や才能教育の領域に対し、心理学界の関心が高くなかったと考えられる。

以上で述べたように、アメリカの理論を日本に紹介した後、松村は、『アメリカ教育学会紀要』に掲載された、「MI（多重知能）理論の学校教育への応用」（2001）、『関西大学文学論集』に掲載された、「アメリカ才能教育の展開」（2002）を経て、『アメリカの才能教育——多様な学習ニーズに応える特別支援——』（2003）を発刊した。この時期から、天才・英才・才能児に対していかなる教育を施すべきか、天才・英才に育てるためにいかなる教育を施すべきか、という方向性から、個々の子どもにいかなる教育を施すべきか、という個性化の方向性へと変わり始めたと考えられる。松村は、同書の「はじめに」で、「アメリカの才能教育に関する教育・心理学的概念と、学校での才能教育の多様な実践形態について、その一端を概観する」と同書の意図について述べている。その後、アメリカでの才能教育の実態について紹介した（松村、2005a, 2005b）。同時期に、松村は、日本特殊教育学会第42回大会シンポジウムで「才

能教育と特別支援教育」の企画者となった。その後、『東洋文化研究』に掲載された、野添絹子の「中国の才能教育の現状と課題——アメリカとの比較——」（2007a）など、才能教育の実態についての研究は、アメリカ以外の地域にも及び始めた。野添の専門は教育学、神経心理学、認知心理学、英語教育である（アミクス発達支援プログラム、2019）。

## V 二重に特殊な子どもたち（twice-exceptional）

MI理論が紹介されると、才能と障害を併せ持つ二重に特殊な子どもたちが注目され、どのような教育を施すべきか議論されるようになった。例えば、『アメリカ教育学会紀要』に掲載された、野添の「学習障害児のための才能教育に関する考察——メリーランド州モンゴメリー郡公立学校を例に——」（2007b）、『関西大学文学論集』に掲載された、松村の「才能のある学習困難児のための教育プログラム——2E教育の基礎固めのために——」（2007）、『アメリカ教育学会紀要』に掲載された、野添の「発達障害と才能を併せ持つ子どものための教育方法の工夫——2E（二重の特別支援）教育の新しい支援のあり方 RTI について——」（2009）が執筆された。もっとも、この時点では、二重に特殊な子どもたちに注目している研究者は少なかった。

## VI 教育学・教育社会学との接近

才能教育の実態という研究対象は、教育学や教育社会学でも扱われるものであるため、心理学における才能教育の実態の研究は、教育学や教育社会学と共同で実施されたり、学際的な性格を帯びたりするようになった。2010年になると、日本で初めての才能教育に関する総合的な講義が放送大学大学院で開講された。その際使用されたテキストが、放送大学教授で教育社会学を専門とする岩永雅也と松村が編著者となった『才能と教育——個性と才能の新たな地平へ——』（2010）であった（2E教育フォーラ

ム, 2018)。この講義の主任講師は岩永と松村であり、野添は全回の司会を務めた（松村・石川・佐野・小倉, 2010）。同時期には、松村、石川裕之、佐野亮子、小倉正義が編者となって『認知的個性——違いが活きる学びと支援——』（2010）を出版した。出版当時、石川は比較教育学を専門とする京都大学高等教育研究開発推進センター特定助教、佐野は教育方法、学校建築を専門とする東京学芸大学非常勤講師、小倉は発達臨床心理学を専門とする鳴門教育大学大学院学校教育研究科講師であった。松村による、同書の「あとがき」によると、石川は、日本における数少ない才能教育の教育学研究者の1人であり、日本人で初めて才能教育をテーマとする博士論文を執筆した人物である（松村・石川・佐野・小倉, 2010）。

## おわりに

以上で見てきたことからすると、心理学の分野では、皆が非凡な人物になれるという前提で、子ども

の能力を発揮させるために早教育が主張されるところから出発したが、軍事的背景の影響で、意図的に天才を輩出する手段として早教育が主張されるようになった。そして、現在では、当初の、子どもの能力を発揮させるという方向には戻ったが、早教育に限らず、子どもの個性に合わせた教育をすべきだ、という方向に至っている。しかし、この方向に至ったのは、国内の議論の影響ではなく、アメリカから理論が持ち込まれたからだと考えられる。戦後には、IQ 偏重の流れに対して疑問が投げかけられることもあったが、新たな理論が確立するには至らず、戦後の研究は、新たな理論を模索する流れを作ったという意味で間接的な影響を与えたにとどまると考えられる。また、軍事的背景の影響が弱まっても、経済的背景の影響で、教育が国力増強の手段とされる状況は変わっていないと考えられる。心理学の成果からすると、国力増強に直接関係しない個性をもった子どもの個性に合わせた教育も施されることが望ましい。紙幅の関係で割愛した部分は今後の課題としたい。

## 引用文献

アミクス発達支援プログラム (2019). アミクスとは アミクス発達支援プログラム

Retrieved from <http://www.ammico.co.jp/amiks/policy.html> (2020 年 10 月 12 日)

藤村 宣之 (2014). 知能の発達 下山 晴彦 (編集代表) 誠信心理学辞典 新版 (pp.209-210) 誠信書房

Gardner. H. (1999). *Intelligence Reframed: Multiple intelligences for the 21st century*. New York, NY: Basic Books.

(ガードナー, H. 松村 暢隆 (監訳) (2001). MI: 個性を生かす多重知能の理論 新曜社)

早川 元二 (1956). 才能教育 教育心理 4(2), 86-88.

Human Intelligence. (2018a). Joseph S. Renzulli Human Intelligence

Retrieved from <http://www.intelltheory.com/renzulli.shtml> (2020 年 10 月 12 日)

Human Intelligence. (2018b). Howard Gardner Human Intelligence

Retrieved from <http://www.intelltheory.com/gardner.shtml> (2020 年 10 月 12 日)

岩永 雅也 (1997). 序——いま、なぜ才能教育か 麻生 誠・岩永 雅也 (編) 創造的才能教育 (pp.3-10) 玉川大学出版部

岩永 雅也・松村 暢隆 (編) (2010). 才能と教育——個性と才能の新たな地平へ—— 放送大学教育振興会

岩田 茂樹・野呂 正 (1966). 英才児 松本 金寿 (編) 特殊児童双書 6 明治図書出版

香川 生 (1918). 時評一束 心理研究 13(78), 690-695.

関西学院大学心理科学研究室 (2019). 歴代教授の紹介 関西学院大学心理科学研究室

Retrieved from <http://psysci.kwansei.ac.jp/introduction/history/professors/> (2020 年 10 月 12 日)

木村 久一 (1913). 天才教育論 心理研究 3(15), 449-462.

木村 久一 (1916a). 英才教育の話 心理研究 10(57), 225-248.

木村 久一 (1916b). 英才教育の話 (二) 心理研究 10(58), 462-494.

木村 久一 (1916c). 英才教育の話 (三) 心理研究 10(60), 798-807.

木村 久一 (1917a). 英才教育の話 (四) 心理研究 11(61), 9-24.



- 木村 久一 (1917b). 早教育と天才 心理学研究会出版部
- 木村 久一 (1918). 早教育に対する非難に答ふ 心理研究 14(79), 83-100.
- 北野 藤治郎 (1958). 特異才能児のその後——特集・特殊児童の心理—— 児童心理 12(9), 999-1003.
- 国民教育研究所 (編) (1971). 子どもと教育実践 教育改革と国民教育 1 鳩の森書房
- 子安 増生 (1989). 社会的知能の研究——文献展望—— 京都大学教育学部紀要 (35), 134-153.
- 子安 増生 (1992). 知能 東洋・繁多進・田島 信元 (編) 発達心理学ハンドブック (pp.603-617) 福村出版
- 松本 金寿 (1953). 天才教育の基本的諸問題 教育技術 8(4), 60-61.
- 松村 暢隆 (1994). 英才教育から全校拡充学習へ——アメリカの SEM の学校教育改革への示唆—— 関西大学教職課程センター年報 8, 99-116.
- 松村 暢隆 (1999). スタンバーグによる知能の三部理論 関西大学文学論集 48(3), 17-46.
- 松村 暢隆 (2001). MI(多重知能)理論の学校教育への応用 アメリカ教育学会紀要 (12), 40-49.
- 松村 暢隆 (2002). アメリカ才能教育の展開 関西大学文学論集 52(1), 61-81.
- 松村 暢隆 (2003). アメリカの才能教育——多様な学習ニーズに応える特別支援—— 東信堂
- 松村 暢隆 (2005a). 1B3-B3 理数才能教育のための州立学校: 数学・理科アカデミー (特別寄宿制ハイスクール) (才能のある児童・生徒を喚起し、伸ばす理数教育プログラム——米国における取り組みを中心として——) 日本科学教育学会年會論文集 29(0), 249-250.
- 松村 暢隆 (2005b). 早期カレッジ・ハイスクールの興隆——高卒時の準学士号取得で学習意欲を高める—— 関西大学文学論集 55(3), 101-117.
- 松村 暢隆 (2007). 才能のある学習困難児のための教育プログラム——2E 教育の基礎固めのために—— 関西大学文学論集 57(3), 97-113.
- 松村 暢隆・石川 裕之・佐野 亮子・小倉 正義 (編) (2010). 認知的個性——違いが活きる学びと支援—— 新曜社
- 松村 暢隆・鈴木 陽子・寺田 洋・森 重敏・南 真紀子 (2005). 準備委員会企画シンポジウム 6 才能教育と特別支援教育 (日本特殊教育学会第 42 回大会シンポジウム報告) 特殊教育学研究 42(5), 370-372.
- 永井 潜 (1931). 民族衛生の使命 民族衛生 1(1), 2-14.
- 成瀬 悟策 (1963). 英才児・特殊才能児の学校適応——特集・学校ざらい—— 教育と医学 11(5), 398-403.
- 野呂 正 (1971a). 今日における英才教育とその問題点 (現代社会と子どもの教育 (特集)) 児童心理 25(1), 102-107.
- 野呂 正 (1971b). 優秀児の思考力——その特色と指導の要点について (思考力を育てる (特集)) —— 児童心理 25(5), 147-152.
- 野添 絹子 (2007a). 中国の才能教育の現状と課題——アメリカとの比較—— 東洋文化研究 (9), 63-91.
- 野添 絹子 (2007b). 学習障害児のための才能教育に関する考察——メリーランド州モンゴメリー郡公立学校を例に—— アメリカ教育学会紀要 (18), 41-53.
- 野添 絹子 (2009). 発達障害と才能を併せ持つ子どものための教育方法の工夫——2E(二重の特別支援)教育の新しい支援のあり方 RTI について—— アメリカ教育学会紀要 (20), 31-44.
- 大伴 茂 (1948). 日本天才児の研究 平凡社
- 大伴 茂 (1961). 日本天才児の心理学的研究 (関西学院大学研究叢書, 第 12 篇) 弘文堂
- 大伴 茂 (1963). 天才——優秀児は生むことができる—— (現代っ子の心理 / 第 1 巻) 青山書店
- Renzulli, J. S. (1995). Building a bridge between gifted education and total school improvement. Storrs, CT: NRC/GT. (レンズリー, J. S. 松村 暢隆 (監訳) (2001). 個性と才能をみつける総合学習モデル 玉川大学出版部)
- 齋藤 茂三郎 (1919a). 社会改良と優生学 心理研究 16(91), 68-85.
- 齋藤 茂三郎 (1919b). 軍事に應用された米國の心理学 心理研究 16(92), 223-232.
- 齋藤 茂三郎 (1932). 天才の輩出について 民族衛生 1(6), 623-625.
- サトウ タツヤ (2016). 原理・研究法・歴史 子安 増生 (編著) 心理学 勁草書房
- 関 計夫 (1965). 才能教育の心理学——特集・創造性とカウンセリング—— 教育と医学 13(1), 29-35.
- Strenberg, R. J. (1985). Beyond IQ: triarchic theory of human intelligence. NY: Cambridge University Press
- Strenberg, R. J. (1996). Successful intelligence: how practical and creative intelligence determine success in life. New York: Simon & Schuster
- Strenberg, R. J. (1997). Thinking styles. NY: Cambridge University Press. (スターンバーグ, R. J. 松村 暢隆・比留間

---

太白（監訳）（2000）．思考スタイル——能力を生かすもの—— 新曜社）

東北大学附属図書館（2020）．資料解説 東北大学附属図書館

Retrieved from <http://www.library.tohoku.ac.jp/collection/collection/comentary.html/> （2020 年 10 月 12 日）

東京文理科大学内児童研究会（編）（1948）．特殊児童の心理（児童心理叢書，5） 金子書房

2E 教育フォーラム（2018）．関連図書 2E 教育フォーラム

Retrieved from <http://2e-education.org/ci/> （2020 年 10 月 12 日）